

令和元年 東日本台風災害 「災福ネット」の活動を振り返って

支援方針

3つの支援に一体的に取り組む



東日本台風（台風第19号）災害から、半年が過ぎようとしています。平成31年2月に発足した災福ネット（長野県災害福祉広域支援ネットワーク協議会）は、今回、長野県ふくしチームを避難所に派遣するなど初めて災害支援に取り組みました。災福ネットの取り組みを振り返り、避難所から在宅まで一体的な支援の重要性を考えます。



避難所と在宅支援 一体的取り組みを目指す

図1

令和元年10月12日、千曲川流域の各地に避難所が開設されました。災福ネットは、14日に長野市から要請を受け、同市内の避難所に長野県ふくしチームの派遣を開始しました。

避難所の避難者は、日中は仕事や家の片付けで不在にしており、ニーズ把握さえ難しい状況でした。

一方、被災した自宅の2階に住み、避難所にお弁当だけ取りにくる被災者も少なくありませんでした。

このような中で、災福ネットは、避難所と在宅支援を一体的に取り組むことを支援方針として活動しました。

災害派遣福祉チームへの 期待の高まり

図2

東日本台風災害では、宮城県、栃木県、埼玉県、長野県の4県で各県の災害派遣福祉チーム（DWAAT）が活動しました。このDWAATは、避難所の福祉支援の全国共通の仕組みとして構築が急がれているものです。

長野県ふくしチームは、ぐんまDWAATの応援を受けながら、長野市内の二つの避難所（北部レクリエーションパーク、豊野西小学校）に「なんでも

相談コーナー」を常設するなど、59日間の派遣を行いました。

チーム員養成研修終了後間もない発災であり、チーム員の確保、引継ぎ体制など様々な課題はありましたが、ぐんまDWAATの支えもあり、医療・保健・看護関係者と連携しながら、避難所の閉鎖まで福祉支援を継続することができました。

災害VCと連携した 在宅避難者支援

図2

一方、被災した自宅の2階や親戚宅に避難している在宅避難者のニーズ把握が大きな課題となっています。

災福ネットでは、長野市災害ボランティアセンターと連携して、介護支援専門員による被災者サロンを被災地に設置するなど在宅避難者支援に取り組みました。

今回の経験をふまえ、災害ボランティアセンターと連携した福祉等の専門相談機能を充実していく必要があると実感しています。

被災事業所への支援と 地域貢献活動の促進

図3

災福ネットと長野県社会福祉法人経営者協議会では、アンケート調査や長

図1

災福ネットの活動状況

	10/12	11月	12月	1月
避難所の概況	須坂市他 約120人 長野市 約700人、11カ所 約3600人	閉所⇒統合避難所へ 公営、みなし、仮設等入居	引き継ぎの課題	飯山市等 県、長野市、「地域ささえあいセンター」
外部支援状況	DMAT中心	保健、看護、PT、ふくし等が連携	看護、ふくしチーム	
ふくしチームの動き	○先遣隊派遣 長野市、上田市、須坂市 ○長野市での一般避難所支援 長野県ふくしチーム 10/14~12/10 ぐんまDWAT 10/24~12/10 ○長野市での福祉避難所支援 ⇒ 1カ所、5名が入居 ふくしチーム、県介護福祉士会 10/14~11/30	派遣延長	長野 59日、102人参加(のべ402人) ぐんま 49日、46人参加(のべ230人)	避難できなかった課題
在宅避難者支援 (民間サイドから)	○10月末 保健師の在宅ニーズ調査に同行 ○長野市災害ボランティアセンター ⇒ニーズ調査/専門相談(ケアマネ・看護) ○支援NPO等の情報収集			情報共有連携の課題
事業所支援	○被災事業所の地域貢献活動支援 ⇒ 12/12 豊野めくめく亭スタート ○長野市北部被災事業所連絡会 (11/7、12/24)			

避難所支援

地域連携

事業所支援



開設初期 段ボールベッド組立



多職種とのミーティング



なんでも相談コーナー



地域ささえあいセンター

図2

長野県ふくしチームの活動

一般避難所支援 (DWAT機能)

① ラウンド・アセスメント

- 保健、看護チームと連携して要配慮者等に声掛けを行う。
- 服薬の確認や血圧、体温の測定を行いながら、体調や不安なこと、被災体験などをお聞きする。
- 顔見知りになる中で今後の住まいの確保等について相談につながるケースもあった。

② 要配慮者支援

- 要配慮者の福祉サービス利用支援、地元相談機関へのつなぎ。
- 配慮が必要な避難者への定期的な見守り、服薬管理や声掛け。
- 地元相談機関の指示を受けて、病院やデイサービスへの送り出しの支援なども行なった。

③ 環境整備



階段の手すり設置

④ なんでも相談コーナー



⑤ 集いの場づくり

避難所の高齢者等を対象に介護予防の体操実施。理学療法士とふくしチームが分担。



福祉避難所の支援



10月13日、長野市北部保健センターで、福祉避難所の設置を支援。また、県介護福祉士会と連携して介護職の派遣調整を実施。

地域連携



長野市災害ボランティアセンターで、介護支援専門員や看護師による被災者相談を実施。

図3

長野市北部地域の福祉施設避難状況

名称	避難状況	避難先	避難期間	現 状	避難中の収入
富竹の里	特養 45名 ショート 10名 (デイ利用者で重度の方をショートステイに事前避難) 地域密着特養 19名 合計74名避難	避難先、近隣障害者施設「いつわ苑」3階ホール (事前協定あり)	10/13~10/16	施設自体は停電があったものの水害による被害なし。停電解消後帰所、通常営業。	毎月の収入は通常時と同様
県社会福祉事業団	長野市豊野地区にあるグループホーム12カ所のうち9カ所で避難。 そのうち2カ所が床下浸水、1カ所が床上浸水 他、作業所3カ所被災等	避難先:水内荘	10/13~11/6	○グループホーム、障害者福祉センター、地域活動支援センターは再開。 ○作業所2施設は、仮施設で再開、再オープンは5月以降予定。 ○1施設は事業廃止。	毎月の収入は通常時と同様
賛育会豊野事業所	グループホーム 18名 特養 90名 老健96名 介護医療院 60名 ケアハウス 18名 利用者計 276名が避難	避難先 病院19 施設37 計56カ所	約半数が現在も避難中 ○10/15~訪問系から順次再開 ○12/10~入所再開	施設被害:1階設備すべて水没。 8月末には1階部分の改修完了予定。	毎月の収入は通常の半分以下
りんごの郷	特養 87名が避難 1:50 垂直避難完了 7:15 自衛隊ヘリ等で救助開始 17:30 避難完了	避難先:特養「若槻ホーム」地域交流スペース (普段の交流あり)	現在も避難中 ○若槻ホーム 10/13~11/17 ○法人内の休止中施設へ移動 11/17~	施設被害:1階天井付近まで浸水。 改修準備中 原状回復で利用者が戻るのか(補助金の仕組み)	毎月の収入は通常時と同様



長野市北部災害VCりんごサテライト
(被災した特別養護老人ホームりんごの郷敷地を借用)



長野市豊野地区に設置された「寄り合い処 ぬくぬく亭」
賛育会豊野事業所職員が常駐。被災者サロンを実施中。



4つの社会福祉法人が共同で農地の漂流ごみ片付け業務を長野市から受託。
障がいのある利用者の仕事づくりにつながった。
(のべ、650人が参加、時給1,250円)

「地域の復興なくして 事業所の復興なし」

被災法人は、甚大な被害の一方で、

野市北部地域被災法人連絡会を開催するなど、被災事業所のニーズ把握に取り組みました。

堤防決壊という「想定外」の状況の中、入居者やデイサービスセンター利用者の避難支援など、各事業所の緊急時の取り組みを共有しました。

また、現在も入居者の一部で避難生活が続いている賛育会豊野事業所では、発災後は毎月の収入が半分以下に落ちこんだこと、特別養護老人ホームりんごの郷では、災害に強い施設づくりを構想したところ、原状回復を原則とする災害復旧補助金の仕組みがネックとなっていることなど、被災事業所の再建の課題も明らかになりました。

本来事業がストップした施設や人材を活用して、地域の復興に貢献したいという熱意を持っていました。

災福ネットでは、被災地の在宅避難者の拠り所として「ぬくぬく亭」の設置を支援。本業に従事できない賛育会豊野事業所の職員が、この拠点に常駐してサロンの運営などを行っています。

また、長野市内の障がい者就労支援事業所は、今回立ちあげた農業復興ボランティアプロジェクトと連携するなかで、長野市から農地への災害漂流ごみの片付け業務を受託し、のべ650人が従事しました。

このような、被災地での社会福祉法人の各種貢献活動が取り組まれたことにも、災福ネットのネットワークの力が表れていると考えています。